

トピックスIV

『米国におけるB型肝炎ワクチン最新情報』

病原微生物検出情報（月報）IASR Vol. 23 No. 9
September 2002より（Vol. 23 p. 233-233）

●B型肝炎ワクチン予防接種、1982～2002年－米国
（CDC、MMWR、51、No. 25、549-552 & 563、
2002より抄訳）

2002年は、米国が世界に先駆けてB型肝炎ワクチンを導入してから20年目にあたる。1982年以前には毎年、約2万人の小児を含む20～30万人がB型肝炎に感染していた。1982～2002年までに、およそ4,000

万人の新生児と3,000万人の成人がB型肝炎ワクチンを接種したと概算されており、2001年の米国のB型肝炎感染者は79,000人に減少した。

1982年にB型肝炎ワクチン予防接種に対する公的な推奨がなされて以来、その対象は段階的に拡大されてきた(表)。また、財源の確保、法の整備がなされたことも成功の要因であると考えられる。

ワクチン接種を広めていく中で安全性などの問題点が議論されたが、現在では安全なワクチンとされている。今後も全年齢層における高いワクチン接種率の維持、特にハイリスクの成人に対する接種率の向上が求められる。

1982年6月25日	ハイリスクグループ*の成人に対するB型肝炎ワクチン接種が、はじめて公的に推奨された。
1984年6月1日	HBs抗原陽性の母親から生まれた児に対するワクチン接種と免疫グロブリン投与、および、ハイリスクグループの妊婦のHBs抗原検査が推奨される。
1985年6月7日	複数の相手と異性間性交渉をもつ人、およびB型肝炎の流行地に6カ月以上旅行する人に対するワクチン接種が推奨される。
1988年6月10日	すべての妊婦に対してHBs抗原検査が推奨される。
1990年2月9日	血液や血液が混入した体液に接触する警察、消防などの従事者、および、B型肝炎流行地からの養子を受け入れた家族に対するワクチン接種が推奨される。
1991年11月22日	アメリカ合衆国のすべての幼児に対するワクチン接種が推奨される。
1995年8月4日	11～12歳のワクチン接種歴のないすべての小児に対する接種が推奨される。
1999年1月22日	0～18歳のワクチン接種歴のないすべての小児に対する接種が推奨される。
2002年1月18日	出生直後に第1回目のワクチン接種を行うのが好ましいとされる。

*ハイリスクグループ

医療従事者、発達障害者施設の利用者と職員、血液透析患者、男性同性愛者、経静脈薬物使用者、血液凝固因子の投与を受ける患者、慢性B型肝炎ウイルス感染者の家族、およびそれと性交渉をもつ者、B型肝炎ウイルス感染者が高率に存在する地域の住民（アラスカ、太平洋諸島住民と、B型肝炎流行地からの移住者、難民）、長期受刑者